P-057

高校生は性の不同意に関する相談に
どう応じるか-発達特性との関連を
踏まえた検討-

三浦 巧也

東京農工大学

本研究は、性的同意がなされず性暴力となるリスクを減らすため、初性行為が17.3歳という調査を考慮し、高校生が性行為について不同意を主張できるための視座を得ることを目的とした。自身の性交に関する意思について回答することの負担を避けるため、架空の事例によるケースメソッド法を用いて質問を作成した。分析は、KH Coder 3によるテキストマイニングを行った。加えて、発達特性に起因した困難さを外部変数とした分析も行った。高校生1000人を対象とした。なお、本研究は、東京農工大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会にて承認を受けて実施し、保護者と本人より個人情報取り扱い、学会で発表する旨について書面にて同意を得た。分析の結果、まず、高校生が相手に不同意が伝えられない理由として、「断ると嫌われるという不安」「相手との関係の悪化を怖れた」「雰囲気になされてしまった」「断り切れなかった」「意思が弱い」という5つのカテゴリーが抽出された。次に、不同意が伝えられないと友人から相談を受けた際の応答について、「本当に好きなら避妊して欲しいと伝える」「責任問題を伝える」「正直に伝える」「勇気を出して断る」「将来のことを考える」という5つのカテゴリーが抽出された。また、ASD困難尺度の得点が高い群の高校生からは、「付き合わないほうがよい」「はっきり断る」「関係を終える」等のカテゴリーが抽出された。ADHD困難尺度の得点が高い群の高校生からは、「別れる」「理解してもらおう」「ダメと言う」「自分の体を守る」等のカテゴリーが抽出された。不本意に性行為に至ってしまう理由として、相手との関係性が悪化することを怖れてしまうことにより、断り切れなくなってしまい、結果としてその場の雰囲気に流されてしまうことが推測された。そして、友人から不同意について相談された際には、お互いに将来について話し合うことが重要であり、正直に気持ちを伝え合うことができる関係が求められていることが示唆された。また、発達に起因した困難さがある高校生は、よりよい関係性へと発展するよりも、関係をやめて別れることを選択する傾向があることが示された。今後、例えば、彼ら/彼女らと定型発達の高校生をマッチングしたグループディスカッションを通して、性において他者との関係性が発展し得ることが肯定的に考えられるプログラムを作成することが課題である。

P-058

情緒障害児の支援における教師の
困難感について:KJ法による自由記述の
分析を通して岡本 茉桜¹、橋本 創一²、小柳 菜穂³、佐藤 翔子¹、
石川 卓磨³、田中 里実⁴、三浦 巧也⁵¹東京学芸大学 教育学研究科²東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター³東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科⁴東京都立大学大学院 人文科学研究科⁵東京農工大学大学院 工学研究院

本調査の目的は、情緒障害児の支援に困難さを抱えている通常の学級の教師に調査を行い、困難さを生じさせる要因やメカニズムを明らかにすることである。首都圏の通常の学級の小学校1年生の教師1000名に質問紙調査を行った。担任しているクラスにいる情緒障害児(疑いを含む)を1人抽出してもらい、その児童の教育支援上の困難さについて5件法の尺度と自由記述で回答を求めた。

調査の結果305名の教師から回答を得られた(30.5%)。そのうち、本調査では尺度項目の得点より情緒障害児の支援において特に困難さを感じている教師192名を対象とし、自由記述の内容をKJ法を用いて分析した。その結果、大カテゴリーは【特性・素因における理解の問題(136件)】【学校生活における適応支援の問題(122件)】【情緒障害児への支援の葛藤(63件)】【支援を行うにあたっての阻害要因(24件)】の4つに分類された。

【特性・素因における理解の問題】には発達障害や精神疾患に類似する症状に関する教師の理解についてのカテゴリーが7つ含まれており、特に《ADHD様症状への理解(47件)》が最も顕著にみられることが示された。【学校生活における適応支援の問題】には児童の不応答支援の困難さに関するカテゴリーが3つ含まれており、他者に危害を加えるといった《他者とのコミュニケーション(63件)》の問題が多くみられた。【情緒障害児への支援の葛藤】には情緒障害児への支援について教師が抱く葛藤についてのカテゴリーが3つ含まれており、特に《支援の不明瞭さ(32件)》を感じている教員が多いことが示された。【支援を行うにあたっての阻害要因】には保護者との連携の取りにくさといった《保護者の問題(13件)》と人員不足といった《学校や教員の抱える問題(11件)》の2つのカテゴリーが含まれた。

通常の学級の教師の支援を困難にさせている要因は、情緒障害の理解の困難さと不適応を支援するためのノウハウが不足していることにあることが示された。それに加えて学校の支援体制の不備、家庭との連携の不十分さが支援の困難さを助長させていることも示された。したがって、通常の学級の教師に対する特別支援教育への理解の促進および、専門家の増員や教師の業務の調整などの学校の基盤の整備を充実させ、情緒障害児の支援を行う環境を整えていく必要があることが示唆された。